

論文 / 著書情報
Article / Book Information

論題(和文)	知財見聞録 中国清華大学を訪問して
Title(English)	
著者(和文)	田中義敏
Authors(English)	Yoshitoshi Tanaka
出典(和文)	発明, Vol. 112, No. 8,
Citation(English)	THE INVENTION, Vol. 112, No. 8,
発行日 / Pub. date	2015, 8



知財見聞録

中国清華大学を訪問して

東京工業大学 イノベーションマネジメント研究科 教授 田中 義敏

中国深圳市

東工大―清華大学合同プログラムの集中講義として、毎年、清華大学を訪れてきたが、去る5月24日～31日に北京の本校に加えて^{しんせん}深圳市の分校でも講義を行ってきた。

深圳分校の正式名称は「清華大学深圳研究生院」である。2001年6月に清華大学と深圳市政府の共同で同大学の唯一の分校として広東省深圳市南山路に設立された。深圳市は、1980年に改革開放路線をうたった鄧小平によって経済特区に指定され、それ以降、急速な経済発展を遂げている。

鄧小平は、中華人民共和国建国のリーダーである毛沢東の没後、彼の後継者であった華国鋒から実権を譲り受けて同国の最高指導者となり、毛沢東が推進した文化大革命によって疲弊した国の再建に取り組み、改革開放政策

を推進して社会主義経済の管理下に市場経済を導入し、近代化の礎を築いた。

改革開放から発展した深圳市の心臓部には、小高い丘からなる蓮花山公園があり、そこから市内を一望することができる。また、「改革開放の父」として鄧小平の銅像が建てられており、市民からも親しまれている。

深圳市の総面積は約1950km²。そのうち、経済特区と呼ばれる地区は約20% (約390km²) である。総人口1400万人、すごい勢いで経済発展しており、2012年の市総生産は1兆1502億元。上海市、北京市、広州市に次ぐ第4位の都市となった。また、中国の大都市の中では最も所得が高い。

1980年以降、莫大な外国投資を誘致した結果、製造業の発達が目立っているが、近年は情報通信産業やサービス業も急速に発展している。

ちなみに、最近のブームというか、今後の新たなビジネスの柱になるか、いかなる規制が敷かれるかなど、何かと話題の「ドローン」であるが、その世界市場の約7割を占有しているJDIも、深圳市に所在する企業である。

香港と隣接している深圳市は、以前から中国国内では裕福な地域であった。昨年、1人当たりのGDPが1万ドルを超えたが、これは中国の都市として初めての快挙だという。現在、深圳市に居住する香港人は6万人を超え、東地区への移住も進んでいる。

深圳研究生院のミッション定義

今回、深圳分校の教授から興味深い話を伺ったので、その幾つかを紹介しよう。深圳分校は、深圳地区で最初に大学院を設置し、市の発展とともに優秀な学生を育成してきたのだという。



深圳経済特区の中心 蓮花山公園で (写真左から、王さん、張さん、中川正宣教授、筆者)



偉大なる鄧小平の銅像の前で記念撮影

当初は、中国南部の環境や水処理等、地域産業と大学の橋渡しの役割を果たすことを目標としてきたが、近年は地域における産学連携だけでなく、中国全土の中で最も経済力を有するまでに成長した地域大学としての使命を進化させる必要があるとのこと。

同大学に課せられた新たな使命の一つとして、巨大な人口を抱える中国の医療事情の改善がある。これまでは病院の医師が院長として病院経営に奔走してきたが、昨年からは学内に病院経営専攻の大学院を設置し、修士学生を育成しているところだという。

今後、同大学は病院経営専攻の大学院で養成した院生を中国の巨大な医療社会へと輩出していくであろう。

さらに、もう一つ中国にとって重要な専門領域の教育研究を推進しているそうである。

それはなんと、海洋探査技術を専門とする人材の育成である。

現在、南シナ海のスプラトリー諸島をはじめとする海洋探査活動や岩礁埋め立てがさまざまな物議を醸していることをつゆとも感じさせず、実に堂々と新たな構想を打ち出してくる……。

既に戦後復興期を過ぎて安定成長期に入っている日本人には思いもつかない発想で大学のミッション定義に取り組んでいるような気がする。

戦略談義と発想の原点

某教授と食事をし、杯を交わしながらの歓談だったので、どこまでが真実なのかは分からないが、深圳市の次なる戦略は、「いかにして香港を飲み込んでいくか」だという。

香港の平野部は非常に狭く、残りは山岳地帯。ビクトリアピークから望む

100万ドルの夜景は、このわずかな平野部の灯りを指しているにすぎない。

深圳市の戦略とは、香港の平野部に企業を進出させ、旧来の香港企業を平野部から追い出すというもの。山岳部での企業活動は難しく、必然的に手上げ状態となり、深圳市への併合を求めてくるというのだ。

あたかも戦国時代の大名たちによる「国取物語」のようではあるが、全くの冗談とも思えず、妙な説得力がある。「彼らの発想の原点とは何なのか？」という興味がわいてきた。

深圳キャンパスには清華大学深圳研究生院、北京大学深圳研究生院、ハルビン工業大学深圳研究生院が同居しており、これら3大学プラスαが、年に2度の合同スポーツ大会を開催できる大きな共用グラウンドや各大学の附属図書館、誰もが使用できる大規模図書館が設置されている。

同じキャンパス内に競合大学が同居しながら互いに刺激し合い、共用できるものは共有するという合理的な仕組みが導入されているのである。

とはいえ、在校生いわく、各大学のアイデンティティーや競争意識は強く、他大学の学生と話す機会は非常に限られているとのこと。

某教授が語る深圳市の戦略には驚かされたが、彼らは学生のころから他者に対して競争優位を勝ち取る戦略策定の訓練をしているのかもしれない。



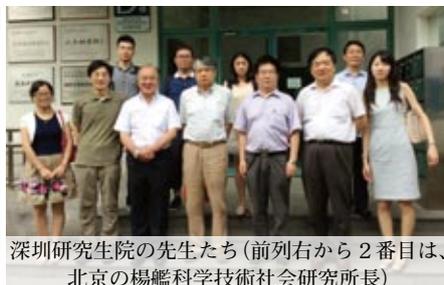
「ガルーダの翼」を模した深圳市のセンター街



キャンパス風景（奥の建物は学生寮）



清華大学深圳キャンパス



深圳研究生院の先生たち（前列右から2番目は、北京の楊艦科学技術社会研究所長）